

『記憶なき人々』における忘却
——セガレン、ポリネシア、文化変容——

末松 壽

はじめに

本日のお話しの標題は「『記憶なき人々』における忘却」ということで、副題として「セガレン、ポリネシア、文化変容」という三つの言葉を挙げております。『記憶なき人々』というのは、フランスの詩人であり小説家であった Victor SEGALEN (ヴィクトール・セガレン) (1878-1919年)が、1907年に公にした小説作品のタイトル *Les Immémoriaux* の日本語訳であります。これはフランスでの発表後1世紀近くを経て2000年に東京にあります国書刊行会という出版社から刊行されました。翻訳者は私、末松壽であります¹⁾。

私の話しは、この小説作品を紹介し、それが主題として扱っている「文化変容」という問題の一端を皆さんに呈示することにあります。先ずしかしヴィクトール・セガレンというのはどんな人だったのか、この作品を書くに至った経緯をお話することから始めます。

I. ヴィクトール・セガレンと『記憶なき人々』

セガレン、ゴーギャン、小林秀雄

我国でこの人物を最初に紹介したのは、おそらく小林秀雄 (1902-1983年) であります。日本における近代批評の確立者と呼ばれることのあるこの評論家の著書の一つに、1958年 (昭和33年) に公にされた『近代絵画』というのがあります。19世紀以後フランスで活躍した何人かの画家と作品の特徴などを紹介した本ですが、そのゴーギャンに関する章の終りで一言触れているのです。「セガラン」と表記しています。なかなか興味深い文章です。これをまず読んでおきましょう。

ヴィクトール・セガランという海軍軍医が1903年、タヒチに行った時、ゴーガンに会おうとしたが、彼は既に死んでいた。パペエテでゴーガンの遺品の競売があり、セガランは、ゴーガンが死んだ時、画架に乗っていたというブルターニュの雪景色と覚しい風景画を買った。競売吏は、絵を逆様に見て、「ナイヤガラ瀑布之図」と喚き、セガランは、七法 (フラン) で落したそうである²⁾。

さらに、この小説の出版にまで至るセガレンの人生について次の文章を読んでいただきましょう。私自身が作品の「解題」の冒頭でセガレンを紹介した文章です³⁾。

ヴィクトール・セガレンは1902年にボルドーの海軍医学校で医師の資格を取得した。学位論文は『自然主義作家における医学上の観察』（別名『文芸臨床医』）で、すでに24歳の青年における医学と文学の二重の資質を見せている。タヒティにあった哨戒艇デュランス号の船医に任ぜられ、同年10月にル・アーヴルを立ち合衆国経由で赴任地に向かう。途中チフスにかかってサン・フランシスコで療養し、一ヶ月の休暇をとり、1903年1月23日に目的地パペエテに着く。数日後、嵐の被害をうけたツアモツ諸島、ニュー・カレドニアで原住民の救助にあたる。彼はそれらのことを『島日記』および「罹災者に向かって」⁴⁾に書きつけている。

小林秀雄が指摘するように、セガレンはゴーギャンに会うことはなかった。当時マルキーズ（マルケサス）島——タヒティからざっと1,500 kmほど離れた群島で現在はフランスの海外共同体（C.O.M.）——に移っていた画家は1903年5月8日に他界する。セガレンは同年8月にマルキーズ島のヌク＝ヒヴァで彼の遺物とりわけ多数の文書草稿を見るときともに、ヒヴァ＝オアでその知人たちに会い、画家が住んでいた小屋（ファレ）を訪れている。9月には、『近代絵画』の著者が指摘するように、パペエテで競売に出た「ブルターニュの村の冬景色」をふくむ7枚のキャンヴァス、数冊の手帳、その他を購入する⁵⁾。画家の与えたインパクトを語る書翰の一節は有名です。「僕はゴーギャンのクロッキーをめくりそれをほとんど生きるまでは、この国やマオリ人の何にも見てなどいなかったといえる」⁶⁾。そして「ゴーギャン最後の住居」を書く⁷⁾。

もっともゴーギャンの作品を見たという事実を拡大解釈して、その事実をきっかけとして『記憶なき人々』の着想が与えられたと推断するのは早計です。というのは、すでにその前からセガレンは作品の執筆を思い立っていたということです。日記をつける習慣をもっていたセガレンは、数年後の書翰において、作品の最初の構想をタヒティ到着の一月余り後の1903年3月1日に位置づけています⁸⁾。これは罹災者救助の旅につづき、ふたたび医者として島々の巡回を行った頃、同時に青年が「ポリネシアの妻」マラエアなる女性との熱帯の幸福に酔っていた（とされる）頃なのです⁹⁾。

文明の変質；『記憶なき人々』の着想

それどころか、タヒティ到着のまさにその日に両親にあてた手紙の中で彼はこう書いていました。

おそらく自然は傷ついていません。けれども文明はこの素晴らしいマオリ民族にとってこの上なく有害だったのです¹⁰。

ここで問題の自然 «nature» とはいわゆる自然界の事ではありません。自然について傷つく云々と言ってもそれは、現代の我が国においてしばしば話題になる環境破壊の意味ではなく、もっと抽象的な意味で深い問題意識の、だがそれゆえ断定し難い——«peut-être» 「おそらく」の介在に注意しよう——表明なのです。「nature」は別の用語で「本性」あるいは「人間自然」と言われるもので、引用文が示しているように文明 (civilisation) に対立する概念です。

そこに見られる二項対立はルソー的ヴィジョンの思い出で、18世紀以後フランス、そしてヨーロッパにおいて常套的思考方式となるものであります。それはおそらく被害を受けていないかもしれない、変質していないかも知れませんが、生活の仕方は、社会は、文化は、文明はある不幸な変容を見せている。それもタヒティ人たち、タヒティ社会そのものが内発的に発展したからではなく、西欧文明の侵入という事件が破壊的契機になっているというのです。後に作品が描くことになる二つの世界のコントラストがすでに予感されていると思われまます。西洋文明の到来、そして同時にキリスト教の宣教が分断したマオリの過去 / 現在、喜び / 不幸 (もしくはニーチェ風に語ればディオニュソスのなもの / アポロ的なもの) の対比であります。

ところでこれは未知のものを前にした鮮烈な「無知の知性」(?) が受けた印象でも旅行者の予断でもない。ある研究家によれば¹¹、アメリカに渡る船上で知り合ったルジャルなる学者¹² の勧めもあって、セガレンはサン・フランシスコ滞在の時期からすでに自分の赴任する国についての文献調査を始めていた。

「昔のタヒティを再構成するために、読み得るすべてを読んだしこれからもう読んでいこう」¹³ と彼は友人に宛てた手紙の中で書いている。実際タヒティでは、——ゴーギャンも書物を借りた——、植民者にして公証人オギュスト・グベル¹⁴ の収集していたポリネシア関係の専門蔵書を活用する。まさに伝統崩壊のきっかけとなった白人旅行者、植民者、そしてキリスト教の宣教師たちのものした文書です。他方、デュランス号の船医は、「文明人のもたらした阿片やブランディ、結核や梅毒…」がマオリの民を蝕んでいることをつぶさに知った。その意味では『記憶なき人々』は、ヨーロッパ人による既存のポリネシア文学全体を踏まえ、かつ外国人としての、また医師としてのフィールドワーク、そして文献調査、また無論想像力による新たな再創造、場合によってはその書き直しとなる¹⁵。

以上、作家セガレンの紹介、『記憶なき人々』の構想、その執筆の下準備のあらましであります。ここで作者がタヒティの歴史的事実に対して改変をくわえたいいくつかの点をあえて注釈しておきますが¹⁹⁾、今は分からなくても仕方ありません。

その後セガレンはタヒティでの勤務を終えて、1904年9月に帰国の途につく。タヒティおよびその周辺に1903年1月から1年8カ月間滞在したことになるわけです。帰路、セイロン島では仏陀に興味をもって調査をするし¹⁷⁾、アフリカではランボーの足跡をたどり¹⁸⁾、帰国後もそれらのことについて考え、文章を書きながら、1907年になって『記憶なき人々』を出版しました。

さらにその後については、彼の関心は中国に移って行き、その一環として日本にも立ち寄っています。すなわち1910年2月4日我国に向けて出発します。日本では長崎、神戸、大阪、東京を訪れています。その後、広東で3日を過ごした後2月27日に香港に到着しているという¹⁹⁾。ですから日本には2-3週間滞在したと言えるでしょう。特筆すべきは、滞在中に浮世絵の傑作、歌川広重の連作『名所江戸百景』いうのを購入しています²⁰⁾。それにこれは私の仮説にすぎませんが、おそらく能楽の上演にも出席したかもしれません。というのは『記憶なき人々』の一部に、もしかしたら狂言に想を得たのではないかと思われる部分 (parade) があるのです。主人の留守中にその宝物を守るためにそれを枕にして眠っている二人の召使から宝物をくすねる抜け目のない男の寸劇です²¹⁾。今はしかしタヒティを話題にする作品の制作につづく後のことには触れないことに致します。

ここで小休止をおいて、多くの日本人にとってあまり馴染みのない地理の、とりわけ地名のもつ意味について若干の説明をしておきましょう。すでに出てきたポリネシア、ツアモツ諸島、ニューカレドニア、マルキーズないしマルケサス諸島、パペエテ、そしてもちろんタヒティなどを地図の上で確かめておきましょう。

II. ポリネシアとフランス文学

オセアニアの地名

世界を大きく5つに分割した地帯の一つであるオセアニア——英語の“ocean”という語をご存知ですから想像できましようが、ギリシャ語やラテン語に由来する文字通り「大洋州」という意味です——は、ニュージーランドおよびオーストラリア大陸を別にすれば、太平洋に位置する非常に多くの島々のグループから成っております。これをまた大きく把握するならば、いずれもギ

リシャ語由来の名前をもつ3つのグループに区分されます。それぞれの名称——丸括弧内はフランス語での表記——に注目したいと思います。すなわち、

メラネシア (la Mélanésie) ……ギリシャ語の « melas » は「黒い」の意味で、
« nesos » は島、« nesis » は小島の意味で、
文字通り黒い人々の住まう島々の地帯です。

ミクロネシア (la Micronésie) ……英語の合成語要素で「小さな」の意味を有する
« micro- » をご存知でしょう。それと « nesis »
の合成で、小さな島々の地帯であります（数年
まえ平成天皇の御来訪で有名になったパラオ
は、このミクロネシアに、しかしメラネシアの近
くに位置しています）。

ポリネシア (la Polynésie) ……英語の結合辞 « poly- » をご存知でしょう。
ギリシャ語の « polus » は「数多い」の意味
で、多くの島々の地帯を意味します。

先に挙げたタヒティ島、トゥアモトゥ諸島、マルケサス（マルキーズ）諸島
はいずれもポリネシアに属しています。いずれもフランスの海外共同体です。
地図上で位置を確認しておくとうれしいです。またニューカレドニアはメラネ
シアに位置しています。これまたフランス領です。

（因みに日本の国土を « Japonesia »（ヤポネシア）と呼んだ作家がいたこと
をご存知ですか。日本人とその文化が南の島々に淵源を持つという主張を込め
た名称で、むろん民俗学の柳田国男の論文および島崎藤村作詞になる「椰子の
実」の歌に反響する思想です。奄美に住んで活躍していた小説家島尾敏雄
（1917-1986年）がその『島にて』というエッセイ集（冬樹社、1966年刊）の
なかでこの名称を提案しております）。

民族誌文学：ポリネシアとフランス文学

閑話休題。ポリネシアと文学、とりわけフランス文学との関係について少々
触れておきましょう。文学の一つのジャンルとして民族誌文学とか民族誌小説
とか呼ばれる一群の作品があります。様々の人的集団つまり民族集団を記述・
描写する作品であります。主としていわゆる「珍しい」異国人の生活を、こ
こでは雑多な列挙をいたしますが、家族、子供の育て方、結婚、性生活、宗教、
社会組織、産業——採集、農耕、漁業、狩猟など——、それにももちろん自然界、
法制度（刑罰）、武器、他民族との関係など様々の面を描きながら、そういう
環境の中での事件とか人間関係、運命を語る作品ジャンルです²²⁾。

ポリネシアの民族誌 (ethnographie ; ethnography) については膨大なもの

があります。それらはすでにそのまま広い意味で文学作品として見ることもできます。しかし同時に人類学とか民族学（柳田国男などで知られる民俗学（folklore）と重なる面もある）、宗教社会学とか更には政治史にかかわる文献資料でもあります。どういうものでしょうか。

大航海者、宣教師、その他

先ず航海者たちがいます。ヨーロッパから出発して世界をめぐる大航海者たち（そして場合によってはその同伴した水夫たち）の残した観察、起こった事件の記録、航海日誌などであります。最も重要なものを二つだけ挙げれば、先ずご存知ジェイムズ・クックの航海記（第一の航海は1768-1771年の、第二は1772-1775年の、第三は1776-1779年の周航）²³⁾です。そのほんの2-3年前に世界をまわったフランスの軍人ブーゲンヴィルの『世界周航記』（これは1766-1769年の周航）²⁴⁾です。いずれも国王の名代として未知の世界のあちこちに領土を広げる、つまり植民地をつくるという使命を帯びておりました。この点ではもっと前にアメリカ大陸に3回も渡りましたコロンブスとて同じです²⁵⁾。もちろんこれらの記録は英語の版ないし翻訳、フランス語訳、日本語訳、そして間違いなくドイツ語訳がなされております。（さらにブーゲンヴィルの作品を用いてフランスの啓蒙時代にデイドロという作家の書いた『ブーゲンヴィル航海記補遺』²⁶⁾という作品があります。結婚の制度あるいは男女関係をめぐってヨーロッパの社会や宗教に対する批判を繰り広げる奇妙な作品であります。

第二に挙げなければならないのはキリスト教の宣教師たちです。これまたそれぞれの宗教を広めるといふ目的で、未知の世界に赴いていたのです。（勿論フランシスコ・サヴィエルというスペイン人イエズス会士、またその他の司祭や修道士たちが16世紀半ばから日本にも来て布教を行ったことはご存知でしょう。この人々もいわゆるキリシタン文学や1595年刊の『羅葡日対訳辞典』をはじめとして、当時の日本に関する貴重な記録証言を残しています）。イギリス人の場合にはプロテスタントのキリスト教、そしてフランス人の場合にはカトリックの宣教が目的でありました。

けれども違った考え方や生き方をする人々を説得するためには、その人たちの言語を学びその人たちの生活や考え方を知らなければなりません。そのため、宣教師たちの中には、ただ一人だけ例を挙げますが、ポリネシアの民の考え方やその風俗を嫌悪したにもかかわらず、これを調べ、記録し、これについて深く考察していった人々もいたのです。例えばイギリスから渡来していたオースモンドという名のロンドン宣教会の牧師です。彼はタヒティに印刷所を作らせ、聖書とりわけ新約聖書をタヒティの言語に翻訳させたりもしています²⁷⁾。これは19世紀半ばのタヒティにおける言語、いわゆるマオリ語に関する

貴重な資料となっております。また西欧化ないしキリスト教化される前のタヒティの習俗についても同様です。

以上の区分で分類することのできない、つまり別の様々の理由でポリネシア、特にタヒティに向かった人たちの証言も少なくありません。それに時期はやや遅れますが、研究や論文もあります。場合によっては、ゴーギャンの『ノア・ノア』²⁸⁾をはじめとして「小説」と呼んでもいいような文書もあります。しかし先に名指した宣教師オースモンドおよびW. Ellis (1794-1872) とともに最重要の記録を残したのは、メランウット (J. A. Moerenhout, 1797-1879. 英語読みでメレンハウトとも表記されています) なる人物であります。これは後にタヒティのフランス領事になる人なのですが、もともとは真珠の採取——といっても自分で海に潜るのではなく、現地人を雇って潜らせるのです——という経済とか商業にかかわる職業上の目的で現地を経めぐっていたのです。その時に出会い、観察し、思いをめぐらせた事ごとを彼は詳しく記録していますのです²⁹⁾。

とにかくしかし、残された多くの文献の明確なジャンル区分は必ずしも容易ではありません。様々の種類の観察、報告がないまぜになっているからです。しかし無理してジャンル区分をしなければならぬわけでもないでしょう。航海者や宣教師も含めて、一言で言えば、現地に住みに行った様々の西洋人たちの旅行記であり様々の証言であります。つまり地理、気候、動植物、食物、道具類、言語、歴史、戦争をふくむ他民族との関係、伝承、神話、社会生活——結婚、性生活、衣服や装身具、刺青 (タトゥ)、家族、首長や奴隷、信仰、病気、死者の扱い方、儀式など——、それにまた現地人による異国人 (白人) との対面の仕方などに関する多くの記録や報告の類です。

このような様々の膨大な文書を参考にして、もちろん旅行者としての体験や観察をもとにして、素人作家も文人作家も自らの文章を書いて行ったわけです。ポリネシアを扱った作品・作家のまとめとして、すでに挙げた例も含めて、最も有名な2、3の名前を挙げておきます。

ロティ、ゴーギャン、セガレン

ロティの『ロティの結婚』(1880年)³⁰⁾

これはフランスの海軍士官でありましたが、日本にも来ていて、長崎で生活し、その時の経験から『お菊さん』というタイトルの自伝風の作品を残していることをご存知の方もいらっしゃるでしょうか。しかしその前に軍務でタヒティに滞在していて、現地の宮廷のこと、そして現地のある娘との関係を通してこの国のことを描いて行ったのです。19世紀のフランスでまさに「民族誌文学」の諸作品によって大流行作家となるロティの処女作であります。なお作家

(J. Viaud) は、大成功を博したこの作品にちなんで、その主人公の名を以後自らの筆名としたのです。

ゴーギャンの『ノア・ノア』(1897年)

今日のお話しの最初に小林秀雄とともに名指した人物です。むろんフランスの大画家であることはご存知でしょう。タヒティからさらにマルキーズ島に移り、ある女性と同棲して生活した記録であり(注28参照)、同時にタヒティやマルキーズ島の古い神話や伝説もこのなかに書き込んでいます。現地では絵をたくさん制作していて、その中には「我々はどこから来たのか、我々は何者なのか、我々はどこへ行くのか」というインパクトの強いタイトルをもつ大作もあります。なお因みにイギリスの作家モーム(W. Somerset Maugham, 1874-1965)の『月と六ペンス』(仏訳：*L'Invouté*)はゴーギャンをモデルにした小説です。

そしてセガレンの『記憶なき人々』(1907年)

先に述べましたが、セガレンは様ざまの膨大な文書類を参考にしました。現地にその種の文献を収集していたゲービルという名の公証人(先に名指しました：注14)がいて、その人物から資料を借りたのです。(これはゴーギャンも同じでした)。もちろん自ら旅行者としての生活、原住民との交わりがありましたし、それに他の旅行者とはいささか違って、医者としての職業上の経験や観察もあったはずですが。原住民がどんな病気にかかりがちなのか、それらの病気は何処から来るのか、元々そこに在ったのかといった問題に直面した訳です。ゴーギャンに芸術家としての物の見方があり、特に原住民の西欧人とは異なる身体の美しさへの関心が強かったように。セガレンの参照した文献について補足しますと、彼は『記憶なき人々』の巻末に詳しい参考文献のリストを付けているのです。26編に及ぶ作品群ですが、その中からすでに名指した古典的なものを復習のために挙げておきますと、ブーゲンヴィル、クック、オースモンド、メランウットなどです。なおそこに小説作家ロティの名前は出てきませんが、19世紀フランスの大流行作家にしてタヒティを扱った先駆者をセガレンが知らなかったはずはないと考えられます。しかしこの沈黙は興味ある問題かもしれません。

さて本日の講義の出発点にもどり、中心となる作品の紹介に移りましょう。

III. 『記憶なき人々』

まずこういう場合には、いわゆる「粗筋」、物語の大筋を話すことから始めるのが通例でありましょうが、それを私はいたしません。この作品の物語を、読んだことのない人に紹介するのは、詳しい注釈を付けながらそれを行わない限り、不可能であります。その理由を述べます。

小説の方法：エグゾティスム

セガレンは「小説の方法」³¹⁾に関して、ある逆説的な思想をもって、それを作品において実践しているのです。どういう方法でしょうか。一言でいえば、それは外国のこと、異文化、異質のものを、ここではタヒティの言語や文化、いわゆる「マオリ文化」を、これをよく知らない読者、つまり端的にはフランス語の読者に提示する際に、読者にとって身近な「言語」に比喩的な意味でいわば「翻訳」して、あるいは彼らの生活習慣と関連させて、あるいは読者のよく知っているものに言い換え、置き換えて語ることではないのです。そういったやり方は20世紀最大の哲学者、作家、批評家の一人であったサルトルも、その『文学とは何か』³²⁾の第3章「誰のために書くのか」の冒頭において展開した、作品を読者に分らせるためにテキストは読者の知性や感覚に合せていわば調合して作るべしという議論でした。

セガレンが目指すのは、反対に異文化を異文化のまま、奇妙なものを奇妙なまま、異様なものを異様なまま、異質のものを異質のものそのまま、つまり異国のものを出来るだけそのままに提示することです。異質性を減らすのではなく、かえってこれを際立たせるような具合にです。何故かと言えば、もし異質のものを同質のものに変換——即ち読者の世界への還元であり同化 (identification) ——してしまうならば、読者には異国のものは伝わらず、かえってある意味で自分のものを再認識する、あるいは自分自身を再確認することしかできないだろうからです。自己自身を知るとか自己自身について考えるということは重要ではありません。ソクラテスの教えでした。しかし反面、そのような翻訳による限り読者は、必ずしも他者を知ることにはなりません。全ては私であり、私は私から逃れ出すことはできない。そのような閉鎖的なナルシスムを避ける、同化を拒む、つまりそれは異国の文化のユニックさを尊重し、保存しなければならない、変質させてはならない、傷つけてはならないという決意そして願望に基礎をおく方法だったと言えるでしょう。

これをセガレンは「エグゾティスム」(exotisme) (無論英語のエグゾティシズム *exoticism* に対応) と呼んでいます³³⁾。それは同一社会内においても無関係ではなく、色々の場面で問題になり得ます。男と女、大人と子供、青森人と福岡人、医者と患者、教師と学生などなどです。指摘するだけにとどめますが、セガレンは、この思想をじつは動物や植物をあつかう場合にも適用しております。動物の生態 (mœurs) をしめすのに、それを人間の風習 (mœurs) を表現するのに適した言語で語ることを拒否するという訳です。最後に、同一文化の場合でも、時間の要素がそこに介入し得ることが考えられます。実際『記憶なき人々』のケースは、著者が現代のフランス語を知る人々を特権的な読者と想定しているとしても、タヒティというフランス人にとって元もとは異文化

の、しかもその過去（18世紀）にかかわる物語なのであります。

しかしそうすれば読者は一体理解することが出来るだろうか、という疑問が起きます。セガレンは出来る、と答えるのです。出来なければならぬ、あるいは出来るはず、と。それだけ読者を高く評価していると言えるでしょう。つまり注意深くしっかり考えるならば、読者は少なくとも或る程度、多かれ少なかれ、そして読み進むにつれて少しずつよりよく、だんだん理解してゆくだろう、という訳です。どうせ異国のことは分からないのだからという読者の理解へのあきらめを前提としたある意味で軟弱な「教育的」配慮ではなく、逆に期待、努力への期待に基づく突き放した「教育」観である、とすることができます。

自分のことならともかく、外的なものは分かりっこない（と信じている）かも知れない読者に、対象を近づけてあげることなどしない。もしそうするならば、対象は当然何らかの損傷をこうむることになりかねません。真正なコミュニケーションが成立するためには、少なくとも逆の事態が起こらなければなりません。つまり読者が自分自身の知性、すなわち家庭、学校、社会において学んだこと、体験によって獲得したことの全て、したがって当然の物となり、まさに私の生活を律する意識となっているもの、その枠、壁から抜け出すよう、むしろ自ら対象に接近し、できることならその中に入って東の間とはいえ生きるよう、楽しむよう、そのような努力を暗黙に、読者に期待し求める書き方があります。読者にはらう尊敬にはそれゆえにまた絶大な、厳しい要求があるわけです。因みに同化ではなく前提となっている「異化」(singularisation, distanciation) というのは、ロシア革命の前後にロシアの大学生たち——いわゆるフォルマリストたち³⁴⁾——が提言して以来有名になった理論的な道具であります。他方これは、ここでは触れませんが、ブレヒトの演劇理論にも関係があります。

勿論そのために作家は様々の工夫を凝らして、独特の手法を用いてその文章、フランス語の文章を書いて行きます。私の翻訳ではそれをできるだけダイレクトに日本語に移し替えるよう試みてはおります。しかしそれは純粋にフランス語の文章の問題でありますので³⁵⁾、ここで詳しく紹介することはできません。

以上、『記憶なき人々』における小説の方法の基本的な原理といったものを説明しました。最後になりましたが、いよいよ作品の主題である記憶の問題を扱いたいと思います。

記憶喪失のテーマ

いやむしろ記憶喪失、忘却のテーマです。作品を構成している登場人物たち

における忘却の事例を挙げることにします。一貫した紹介はできなかった物語を、断片的にはありますが、少しでも紹介することになります。同時にそれによって文化変容のテーマに概念的ではなく、事実に、虚構の事例をもって接近することになります。というのも、挙げる事例は単に一人二人に関する個人的で偶然的な事柄ではなく、すべての登場人物に起こる社会的なある意味で社会化された、つまり社会によって欲せられた事態であるからです。

『記憶なき人々』という標題の意味は、作品の主題に関連せざるを得ない。実際、とりわけ言語にかかわることの多い忘却のテーマは、集団的で意識的で「意図的」ですらある忘却をふくめて、すべての登場人物の生きる状況に応じて多様な変異を見せながら、一貫して提示されます。

伝統宗教の祭司である主人公テリイによる伝えられた語りの失念の挿話からはじまる決定的な挫折の事件はもとより、ポマレ王によるその統治領域における様々の物事にかかる名称の廃止と新設、言い伝えを託された「預言者」(prophète) トップアの死による言葉の死、それに対して標(しるし、文字)を目で追いつつ、従って記憶などせず延々と「話す」、あるいはむしろ「読み上げる」蒼白い人(イギリス人牧師)——プラトン、ルソー、デリダで周知の「危険な」代補³⁰⁾——、白人たちのもつ文字言語に対抗するために、マオリ特有の土着の標をもとめて島々を遍歴する大祭司(これまた優れて言葉を預かる人)パオファイ(この人物はまた主人公テリイの父親らしいとされる)、彼はついにパーク島(イースター島、即ち復活祭の島)の絵文字を発見するが、それは失望しかもたらさない。なぜならば、それらはいずれも物、器具、人を含む動植物、天体などを表象する絵文字、つまり純粋な象形文字であって、物と物との関係とかあるいは物の状態とかその変化とかを表すことはできないのです。物々関係を表すためには例えば助詞か前置詞のような「道具」がなければなるまいし、もしくは文字に格変化のごとき力が備わっていることが必要でしょう。状態や変化を表すには、形容詞とか動詞とかのごとき部類の「絵文字」が必要ではないだろうか。けれどもこれらの表象の発明は象形文字のシステムにとっては容易ではあるまい。

孤立した英国人青年アウテによるタヒティにおいて失われつつある伝承の採集と記録の試み(民族学者の形象)。青年は昆虫や植物を集め、また国の古い伝承を人々とりわけ祭司であったテリイに訊ねて語らせ、記録しようとするのですが、今や改宗して新しい「集団」において大物になりたいテリイの方はもはやそれらを軽蔑してうるさがり、アウテの気をそらすために出まかせの話を口にする。元はといえば彼はその伝統宗教の祭司であって、伝承の担い手、預かり人であったのに。失望したアウテはテリイをなじる:「お前さん、本当に忘れてしまったんだ」。武器の入手という政治的な利害から伝統の信仰を裏切

る別の大祭司ハアマニヒ。もう一人の事例はもっと複雑で悲劇的です。まずエスパーニャ風カトリシズムへの改宗によって伝統を放棄し、だが宣教はとだえる。(ここまでは我が国においても起こったことです)、次に後になってイギリスから渡来するメソヂスト教会を受け入れることができず、いずれの教会からも離れて、ついにはカルト集団ママイヤの指導者となるテアオの屈折した過去との関係。これはテリイによって密告され、創設されたばかりの裁判において死刑の判決を受ける。そしてテリイ自身による最終的なパオファイ否認、まさに父親殺しにして言葉殺しの象徴であります。

結 論

これほど多くの事例が作品を構成している事実をどう考えようか。私にはそれは作者におけるタヒティの過去にかかわるノスタルジアの現れであり、それはいわば文化的な保守主義を示していると思われるのです。そしてそれはセガレンが島に到着した日の感慨：「文明はこの素晴らしいマオリ民族にとってこの上なく有害だった」に通底する感覚であると思われます。

ともかくしかし、問題は1人あるいは数人の度忘れとか失念ではなく³⁷⁾、全体として一国における文化の蒙る変容の事例であることは明らかです。こういう現象を文化人類学では「acculturation」（文化変容）と呼んでおります。この語は1880年頃に米語に出現しております。無論この語には積極的、肯定的、楽天的な側面もあり得るでしょう。なぜなら別のものを取り入れるのですから。豊かになる、と言う意味です。しかし逆に否定的、悲観的な意味も取りうる。なぜなら他のものを採用するために、もしくは採用することによって、逆に忘れられ、捨てられてしまうものもあり、こうして自己自身が、主体が変化し自己喪失してゆくからです。

『記憶なき人々』において問題になる事態を理解するには、この後の意味での危機意識をもった概念化が必要ではないかと思われれます。つまり否定的、悲観的な意味であります。なぜなら、外的なインパクトから始まったとはいえ、伝統文化を恥じ、自己自身を恥じ、軽蔑し、それを捨て去ることによって、人は別のものになろうとするわけです。こうしてついには自己自身、主体が変容して行きます。セガレン自身はこの現象に「décivilisation」という言葉を用いています³⁸⁾。これはもっとうずと鋭い批判性をもつ言葉です。「脱文明化」？それは野蛮への回帰とは別の事であり得るでしょうか。『記憶なき人々』の見せる事例は人物たちの個別性をこえて、共通に民の生活全体の特徴である民族性といったものの放棄や破壊 (ethnocide) ——この語は1970年頃フランス語に出現しております——の徴候と見ることができます。こうして作品は外来の宗教とその文明、珍しい生活の仕方や風俗、更に異国の言語の魅力に圧倒され

て、習俗を恥じ、自らとその父や母、父祖を否認していく人々の物語ということになる訳です。更に言えば「Ethno-sui-cide」(民族性の自己破壊、あるいは民族性の自殺)³⁹⁾の物語、そのようなものとしてセガレンの『記憶なき人々』は読むことが出来るというのが私の結論です。

以上で本日の講義を終わります。ご静聴ありがとうございました。

この講義ノートは、2014年6月3日および2015年6月19日の福岡歯科大学(福岡市早良区田村二丁目15-1)における講義に基づく。公刊するにあたり、若干の補足をおこなった。

Hisashi SUEMATSU

注 釈

1. Victor Segalen, *Les Immémoriaux* (1907), Éditions Plon, coll. « Terre Humaine », 1982 ; 末松壽訳『記憶なき人々』、国書刊行会、2000年1月。
2. 小林秀雄『近代絵画』(昭和33年)、新潮文庫、平成元年、35刷、130-131頁。タヒチ、ヴィクトル・セガレン、ゴーガンいずれも小林の表記である。多数の句読点も原文のまま。
3. 末松壽訳『記憶なき人々』、上掲書、「解題」、403頁参照。
4. V. Segalen, *Journal des îles* (1956), suivi de « Vers les sinistrés » (1903), Préface de A. Joly-Segalen, Fata Morgana, 1988 ; *Œuvres Complètes*, t. I, R. Laffont, 1995, pp. 395-479 et 513-519 ; « Vers les sinistrés », in *Voyages au pays du réel : Œuvres littéraires* de Victor Segalen, Éd. Complexe, 1995, pp. 71-77.
5. Voir H. Bouillier, « Chronologie », *O. C.*, t. I, *op. cit.*, p. LVI.
6. V. Segalen, Lettre à G. D. De Monfreid du 19 novembre, 1903, citée dans la « Chronologie », *op. cit.*, p. LVIII.
7. V. Segalen, « Gauguin dans son dernier décor », in *Mercure de France* (1904年5月)、Fata Morgana, 1986 ; *O. C.*, I, *op. cit.*, pp. 287-291. なおゴーガンとセガレンとの関係については最近の研究として、I. Cahn, « Segalen et Gauguin », in *Victor Segalen, Actes du colloque* du 26 au 28 oct., 1994, Centre de Recherche Bretonne et Celtique, 1995, pp. 147-157参照。
8. 1909年8月付け妻イヴォンヌ宛書簡(H. Bouillier, « Introduction » au Cycle Polynésien, *O. C.*, I, *op. cit.*, p. 101参照。
9. V. Segalen, *O. C.* I, « Chronologie », *op. cit.*, p. LVI.
10. V. Segalen, « Lettre à ses parents » du 23 janvier 1903, citée par H. Bouillier dans l'« Introduction » au Cycle Polynésien, *O. C.*, I, p. 101.
11. H. Bouillier, « Introduction », *ibid.*, p. 101.
12. Lejeal, Léon, 1862 ou 1865-1907. メキシコをはじめとする中央アメリカの古代文化の研究家。コレージュ・ド・フランスの教授。

13. V. Segalen, Lettre à É. Mignard du 24 avril 1903, citée par Bouillier, *O. C.*, I, p. 101.
14. Goupil, Auguste, 1847-1921. タヒティに渡ったフランス人植民者。公証人。
15. 末松壽「解題」、上掲書、404頁。
16. 民族誌の所与に対する作者の重要な改変として、1) ポリネシアの敗北の決定的な開始をヨーロッパとの最初の接触にはなく、20年後の福音の到来に位置づけたこと (J.-J. Scemla, « *Les Immémoriaux et l'Océanie aujourd'hui* », *Actes du Colloque de Brest*, p. 238)、さらに2) 「言の葉の起こり」の組み紐をマルキーズ島からタヒティに移したこと、3) 年代記に無理強いてママイアの逸話を挿入したこと、4) ポマレ2世を意図的に誹謗していること (筆者ならむしろ「戯画化」と呼ぶ) が指摘されている。他方、かなり頻繁に見られる様々な様相をしめす、それでも奔放であることに変わりはない性的なものの描写は、作者が挙げる典拠には見られず作者自身のものであり、彼自身の受けた厳格なキリスト教的な教育に対する反乱であり、相関的に太古の異教的な伝統へのノスタルジアであるとする解釈を Claude Courtot, *Victor Segalen*, Henri Veyrier, 1984, pp. 33 - 38 に読むことができる。作品における自伝的なもの、心理的なものの浸透であります。
17. 仏陀を主人公とする *Siddhârtha* は『記憶なき人々』の後、ドビュッシーとの共同によるオペラ作品を目指して書かれたが実現せず、結局1975年になって劇作品として公刊された。
18. セガレンは1906年4月15日 *Mercur de France* 誌にランボー論 « Le Double Rimbaud » を発表している。Voir *O. C. I*, *op. cit.*, pp. 487-502.
19. Voir la « Chronologie », in *O. C. I*, *op. cit.*, p. LXVI. ただしこの「年譜」の記載では出港と広東到着の日付が明白には分からない。
20. セガレンが購入していたという歌川広重のこの連作は、同じく広重の『東海道五十三次』とともに現在パリのギメ博物館でも見ることが出来る。
21. 二人の召使たちは太郎冠者と次郎冠者を思わせないでもない。その場面は、原住民の祝祭の場面の一部 (*Les Immémoriaux*, *op. cit.*, p. 50 に、また上掲拙訳 75 - 77 頁に読むことが出来る。
22. 筆者は、ほとんど専らロマン派の恋愛小説として読まれてきたメリメの『カルメン』を、その人物構成の複層性——フランス人、エスパーニャ人、イギリス人、ジプシー (ロマ) ——また作品最後に置かれたジプシーに関するエッセーに注目して、民族誌小説として分析したことがある。『メリメの『カルメン』はどのように作られているか——脱神話のための試論』、九州大学出版会、2003年4月発行、139頁参照。
23. James Cook, *Relations de voyages autour du monde*, trad. de l'anglais par G. Rives, La Découverte & Syros, 1998 ; in *Le Voyage en Polynésie*, éd. établie par J.-J. Scemla, R. Laffont, coll. « Bouquins », 1994, pp. 63-135, 135-220 et 268-330. 増田義郎訳『クック太平洋探検』第1の航海～第3の航海、全6冊、岩波文庫、2004年 - 2005年第1刷発行。
24. L.-A. de Bougainville, *Voyage autour du monde*, éd. présentée, établie et

- annotée par Jacques Proust, Gallimard, coll. « Folio », 1982. プルーストの紹介文が実に興味深い。
25. Cf. Ch. Colomb, *La Découverte de l'Amérique*, I. *Journal de bord et autres écrits*, 1492-1493, 2. *Relation de voyage et autres écrits*, 1494-1505, trad. par S. Estorach et M. Lequenne, « Introduction historique » de M. Lequenne, La Découverte & Syros, 2002 ; 青木康征編訳『コロンブス航海誌』、平凡社1993年9月初版第1刷発行。この人物の場合は、それに君主のために黄金を探す目的もありました。
 26. Diderot, *Supplément au Voyage de Bougainville*, O. C. de Diderot., t. XII, Hermann, 1989, pp. 577-647 ; *Voyage autour du monde*, suivi du *Supplément au voyage de Bougainville* de Diderot, L. Rombaldi, 1970. この版と同じく、日本語訳もデイドロとブーゲンヴィルとを合本にしている。ブーガンヴィル『世界周航記』、山本淳一訳+デイドロ『ブーガンヴィル航海記補遺』、中川久定訳、岩波書店2007年第1刷発行。なお『補遺』の作られ方については拙論「タヒティの老人はどのように語ったのか：『ブーガンヴィル航海記補遺』の手法」、山口大学『独仏文学』第26号、2004年、163-191頁参照。
 27. J. M. Orsmond (1788-1856). 1817年4月27日モオレアの布教会に到着。タヒティ語の基礎をノット氏に学ぶ。1824年から1831年までモオレアの南海アカデミー校長。次いでタヒティ半島の牧師。彼の手書きのノートは孫娘 (Teuira Henry) によってその *Tahiti aux temps anciens* (『古のタヒティ』) において利用された。ポリネシアに関する最高の作家であるエリスおよびメランウットに多くの情報をあたえたのはこの人物である。(J.-J. Scemla, *Le Voyage en Polynésie : Anthologie des voyageurs occidentaux de Cook à Segalen*, R. Laffont, 1994, p. 1202に負う記載)。Voir aussi *Mythes tahitiens*, réunis par T. Henry, traduits de l'anglais par B. Jaunez, textes choisis et préfacés par A. Babadzan, Gallimard, coll. « L'aube des peuples », 1993.
 28. Gauguin, *Noa-Noa : Séjour à Tahiti* (1897), précédé de « Gauguin dans son dernier décor » de V. Segalen, Éd Complexe, coll. « Le Regard littéraire », 1989 ; 前川堅市訳『ノア・ノア』、岩波文庫第16刷改版、昭和35年。
 29. J. A. Moerenhout, *Voyages aux îles du Grand Océan : Les tribulations d'un négociant, armateur et ethnographe en Polynésie orientale : 1828-1834*, éd établie et annotée par Eric Poix, Besançon, La Lanterne magique, 2006. この端整な書物は大幅に抜粋されたテキストである。フランス国立図書館 (BNf) 所蔵の原著は1837年にパリの A. Bertrand 社から出版され、数回の再版を見た龐大でかなり乱雑な構成の二巻本である。
 30. P. Loti, *Le Mariage de Loti—Rarahu* (1880), dans *Aziyadé, Le Mariage de Loti, Le Roman d'un spahi...* « Préface » de Cl. Gagnière, Presses de la Cité, coll. « Omnibus », 1989. Cf. *Le Mariage de Loti*, avec Illustrations de J.-G. Domergue, Calmann-Lévy, 1936. 津田穰訳『ロティの結婚』(昭和12年)、昭和16年第5刷(旧仮名旧漢字のテキスト)。
 31. 筆者は「小説の方法」なる概念を伊藤整の同名の名著(1954年刊。諸文庫に収

- 録されている)に負っている。
32. Voir J.-P. Sartre, *Qu'est-ce que la littérature?* Gallimard, 1948, p. 117 sq.
 33. V. Segalen, *Essai sur l'exotisme*, Fata Morgana, 1978 ; L. G. F., 1986 (未完のエッセーです。2編のゴーギャン論を含む) ; *O. C.*, I, pp. 745 - 781 ; 木下誠訳『エグゾティスムに関する試論』/『鞆旅』、現代企画社、1975年、215-241頁参照。
 34. 例えばシクロフスキー、ヤコブソン、トゥイニアノフ、トマシェフスキーなどの評論文 : *Théorie de la littérature : Textes des formalistes russes*, réunis, présentés et traduits par Tz. Todorov, et Préface de R. Jakobson, Éd. du Seuil, 1965 参照。
 35. その点については H. Suematsu, « Le travail de mots dans les *Immémoriaux* — éléments de la poétique exotique de Victor Segalen — », in *Thématique et rève d'un éternel globe-trotter : Mélanges offerts à Shin-ichi Ichikawa*, Tokyo, 2003, pp. 275-285 参照。
 36. Voir J. Derrida, *De la grammatologie*, Seuil, 1967, surtout II, 1-2, pp. 203-235.
 37. 我が国の現代作家小川洋子、高山羽根子らの忘却のテーマは深いモラル上の意味を有する。他方セガレンには同じ主題に個人と集団の弁証法、そして鋭い歴史感覚がともなっている点に注目すべきであろう。
 38. 作者は典拠である一研究論文にコメントしながらこの語を用いている。「Références」 des *Immémoriaux*, Éd. Plon, *op. cit.*, p. 271 ; « Bibliographie » des *Immémoriaux*, *O. C.*, I, *op. cit.*, p. 284. なお翻訳の時点において私は、本質的な重要性をもつこの一語 : *décivilisation* に注意せず、誤訳してしまいました。上掲拙訳書の「民族誌上の典拠」 p. 393 の第12行目の「文明」は「脱文明化」と訳すべきでした。
 39. 英仏独語に於ける « acculturation », « ethnocide » の出現とその意味を大きな辞書で確かめるべきでしょう。「ethno-sui-cide」は筆者の簡単な造語です。